

◆教育講演◆

人 格 研 究 と 看 護 学

千葉大学文学部

青 木 孝 悦

司会 弘前大学教育学部

川 上 澄

人格（パーソナリティ、性格）は大変複雑なものであるからその研究にはさまざまな手法が使われなければならない。性格心理学は何故その人がある事柄についてそのような体験をし、認識を作り、行動するかをその人の特徴から理解しようとする心理学の一領域であり、その形成と構造と力動とを取扱う。

性格は直接みたり測定したりすることはできない。我々がみることのできるのは絶え間無く続いている行動だけである。性格心理学はその行動のなかにある意味的一貫性から仮説的構成概念である性格を推定する。仮説的構成概念（体）は実例心理学事典によれば、「観察された現象を説明するために理論家が作った説明概念である。それ自体は直接観察されないし、ある人にはわからないから、仮説的である。またそれは理論家の心によって「構成」されたものであるから構成体」である。

この概念をどのように作ろうとするのかをふたつの方法を中心に話を進めよう

概念の作り方は又は作られ方は主観性が入る。日常誰しもがやっていることでもあるが、心理学で広く認められている方法は次のふたつに分けて考えることができる。

- 1) 私は人間集団の行動の因果関係を因子得点によって確率的に知りたい
- 2) 私はこの人の行動の因果関係をこの人の構造によって知りたい

1)の場合行動の違いを性格の変数で調べる方法がよく用いられるが、この場合既製のテストが利用されることが多い。心理テストは前にのべた仮説的構成体

（物）を調べる間接的な方法であり、その使用にあたってはテストの性質を十分に知っておく必要がある。

例を不安を調べる問題でみてみよう。不安を調べるテストは今思いつくだけでも

- ① *Personality Schedule*（サーストン）
- ② CMI
- ③ MAS
- ④ GHQ

などがあり、これ等は同じ不安の測定でも内容が大きく違っている。そして不安を調べるのにどれを使ってもよいというものでなく目的によって内容をよくみてからでないとい何等有意な結果が得られないことになる。そこである群とある群でどのテストで差があるかの問題とは別に現在の患者集団にどのような不安の構造があるかを調べた研究を紹介したい。

この研究はもう10年以上になるが、小山（昭50）の卒業論文で取扱ったリハビリ病棟入院中の背髄損傷患者20名の不安を取扱ったものである。小山は入院患者に現在どのような不安があるかを訊ね、これ等を整理して60項目を選び出した。この60項目を被験者は最も自分にあてはまる（9）から最も自分にあてはまらない（1）に迄9カテゴリーに1枚（2枚）、4枚、7枚、12枚（11枚）、13枚（12枚）、12枚（11枚）7枚、4枚、1枚（2枚）の決められた枚数で分類する。（カッコ内は偏平化調整後の枚数）。

この種の分類はQ分類といわれるが、この分類を含む一連の手続きがQ-技法である。通常よく使用されるR-技法は個人間変異が資料であり、母集団において多様な個人差を説明する因子を見ようとする。一方Q-技法における因子分析のものになる資料はその個人の平均のまわりのちらばりで項目がそれぞれどの位逸脱しているかをみる個人内差異を表わす得点であ

表1 調査に用いた60項目

1 漠然とした言葉で表わせないもの	32 病気の治療をしている間に時間が過ぎてしまう
2 将来の経済的な問題	33 運動ができないこと
3 症状が急に変わる事	34 身体的な病気で、精神的なショックを受けること
4 後遺症が残らないかということ	35 自分の気持ちをわかってくれる人がいない
5 長い期間の治療が必要なこと	36 医療費がかかること
6 生きる意欲が失われる	37 生活上の経済的な問題
7 家族や子供にかかる精神的苦痛	38 死に対する不安
8 人生というものに対する不安	39 自分はモルモットにされるのではないか
9 人に看病してもらうこと	40 家庭のいざこざ
10 退院したあと、家族にとけこめるか	41 自分の将来
11 健康な人からおくられてしまうこと	42 病気が再発すること
12 病院ではやりたいことが自由にできない	43 看護婦に対して
13 合併症がおこること	44 好きなものが自由に食べられないこと
14 いつも病気のことを気にしなければなら ないこと	45 健康な時にやっていたことが続けられない
15 健康な時の生活が続けられない	46 自由に人と会えないこと
16 やりたいと思っていたことが実現でき ない	47 注射や薬の副作用に対して
17 病気をしたことで、その後、無理なこが できない	48 自分にされることが、何のためかわから ない
18 家族から離れていること	49 自由に外に出られないこと
19 検査に対する不安	50 ずっと看病してくれる人がいるかどうか
20 手術に対する不安	51 他人に看病させる時の気づかい
21 環境が変わること(変わったこと)	52 どのくらいで治るかという見込み
22 医学的に知り尽くされていない病気では ないかということ	53 親や兄弟に経済的な心配をかけること
23 注射に対する不安	54 その病気に特有の症状
24 医者が自分の病気について、満足に話し てくれないこと	55 身体的な苦痛
25 一生その病気につきまといわれる	56 退院後の社会生活
26 病気についての知識がないこと	57 かかった病気が完全に元通りに治るかど うか
27 排便や排尿の始末をしてもらうこと	58 病気が進行することによって症状が悪化 すること
28 困りの人に心配をかけること	59 痛みとか不眠とかの苦痛
29 病気のため、仕事や勉強が遅れてしま うこと	60 家族や子供の生活
30 医者が信頼できない	
31 処置に対する不安	

るから、いろいろな人の中に見出される個人内差異の共通なパターン、或いは個人内の体制の一貫性(類型)が因子となる。

解釈はそれぞれの因子を代表している人々が高い得点をQ分類において与え項目の内容によって行われる。

この結果別表にあるような6因子が得られ項目内容から表2にあるように因子を解釈した。

この手続きはさらに目的によって情報を引き出せる可能性をもっている。箇条書きにしてみる

- ① 手術後と同じ調査をし同じ分析をする。
- ② 手術前後の分類の得点差を資料として同じ分析をする。
- ③ 同一の資料を手術前後でR技法による分析をする。

表2 得られた6因子

〈第I因子〉 経済的不安

得点	項目番号と内容
9	2. 将来の経済的な問題
9	25. 一生、その病気につきまといわれる
8	36. 医療費が、かかること
8	37. 生活上の経済的な問題
8	41. 自分の将来を考えると
8	60. 家族や、子供の生活

〈第II因子〉 治ゆ不安

得点	項目番号と内容
9	3. 症状が、急に変わること
9	57. 罹った病気が完全に、元通りに治るかどう うか
8	4. 後遺症が残らないか
8	25. 一生、その病気につきまといわれる
8	32. 病気の治療をしている間に、時間が過ぎ てしまう
8	42. 病気が再発すること

〈第III因子〉 自立不安

得点	項目番号と内容
9	27. 排便や、排尿の始末をしてもらうこと
9	28. 周りの人に心配をかける
8	16. やりたいと思っていたことが実現できな い
8	25. 一生、その病気につきまといわれる
8	45. 健康な時にやっていたことが、続けられ ない
8	56. 退院後の社会生活

〈第IV因子〉 混合的不安

得点	項目番号と内容
9	42. 病気が再発すること
9	50. ずっと看病してくれる人がいるかどうか
8	28. 周りの人に心配をかける
8	29. 病気のため、仕事や勉強が遅れてしま う
8	57. 罹った病気が、完全に元通りに治るか どうか
8	60. 家族や子供の生活

〈第V因子〉 将来の生活不安

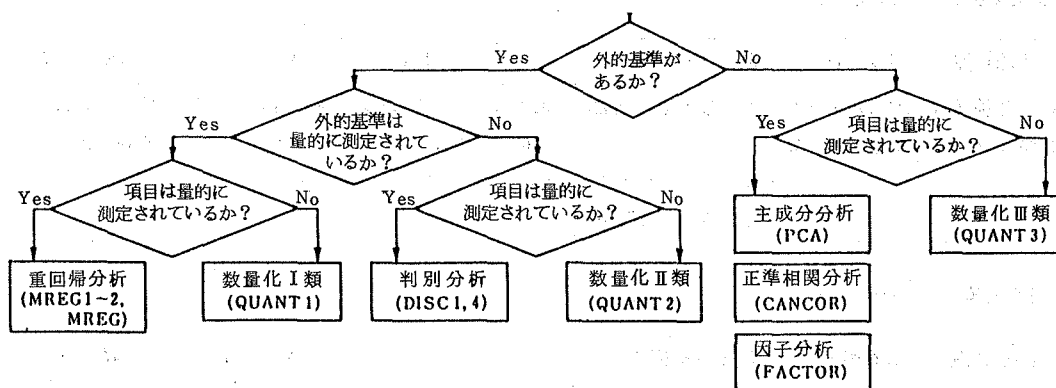
得点	項目番号と内容
9	41. 自分の将来を考える時
9	60. 家族や、子供の生活
8	2. 将来の経済的な問題
8	25. 一生、その病気につきまといわれる
8	27. 排便や排尿の始末をしてもらうこと
8	56. 退院後の社会生活

〈第VI因子〉 長期化不安

得点	項目番号と内容
9	25. 一生、その病気につきまといわれる
9	27. 排便や排尿の始末をしてもらうこと
8	2. 将来の経済的な問題
8	5. 長い期間の治療が必要なこと
8	41. 自分の将来を考える時
8	56. 退院後の社会生活

表3 ささまざまな多変量解析

() 内は共立出版のプログラムソフト名



④ 同一の資料を手術前後の得点差を用いて分析する。

上述の例でみたようにパーソナリティを研究する手法に近年表3にあるような多変量解析が大巾に導入されて来ている。なかでもテストの構成には因子分析がさかんに用いられている。しかし因子分析は信頼性の一種である項目の内的整合性(項目群を多次元に集約し項目の加算可能性を調べる)を見出す手段であって、妥当性(その次元が外部標準との関係で何を測定しているかの問題)にはふれていない。

従って外部標準のとれる資料に関しては、判別分析や重回帰、式は数量化Ⅰ類やⅡ類などの利用によって目的とする変数についての情報を十分引き出すことが必要であろう。

2)の私はこのひとを知りたいでは、この人のパーソナリティ構造をくり返される等価の行動の観察から作りあげなければならない。この際人間一般についての知識はたいへん参考になる。たとえばユングの類型論を知ることによってこの人はどのような体験をしがちな人か、又連想法を用いることで何がコンプレックスになっているかを理解するのが可能であるからである。この人を知るには観察する人(自分も含めての)の観察のくせを知らなくては理解の手段になり得ないだろう。以上のべて来たことを表4にまとめておいた。この人を知るには了解や共感という方法がその内的

この方法も公共性のある仕方にするにはきびしい条件があることを記しておきたい。

〈……自然科学の扱う世界が、外的知覚において感覚を通じて与えられるものとしての外界であるのに対して、精神科学の扱う歴史の世界は、根源的に心的事件と活動の内的把握(反省)を通じて表された内界である。……了解とは他者の表出を介してその内的なものを、自己の内的なものによって共感する方法であり、このためには了解にたずさわる者自身の内的経験の移入が要求される〉 (哲学理論の歴史) 山下より

〈感情移入または共感(Empathy) 感情移入とか、感情移入的であるという状態は、他人の内部的照合枠を正確に知覚することであり、それに附着している情動的要素や意味をも知覚することである。その際に、自分はあたかもその人であるかのようなになるのだが、しかも決して“あたかも……のような”という条件を失わない状態である。したがって、感情移入とは、他人の苦しみや喜びをその人が感じているように感じ、その原因についても、その人が知覚しているように感じとることである。しかも、その時、あたかも自分が苦しんだり、喜んだりしているかのようなものであるという認識を決して失うことがない状態である。もし、この“あたかも……のように”という性質がなくなるならば、それは同一化の状態である。〉

(ロジャース全集)より

表4 行動研究の手法

群を対象にした研究 1

問題意識	対象選択	測定=テスト	テストの実施	処 理	解 釈
日常経験又は 文献ヒント	何らかの 対象群	性格や不安を調べる測 定 MAS, CMI, CAS, YG, MMPI, 16PF	(おなじ) 対象群の (前後) テスト コントロール群テスト	差や相関の計算	性格の差は 不安の差は

群を対象にした研究 2

問題意識	対象選択	尺度選択構成	テストの実施	処 理	解 釈
日常経験又は 文献ヒント	何らかの 対象群	テストの知識 尺度の構成 項目収集 構造化	(おなじ) 対象群の (前後) テスト コントロール群テスト	データの加工に よる被検者群と の対応増	各変数の対応に 関する重みの解 釈

ケースを対象にした研究 3

問題意識	対象選択	データ収集	蓄積した専門的知識	特性の推定	解 釈
この人を知り たい	この人	場面別行動の重複デー タ 手紙, 日記, 行動観 察	性格形成成熟 自我防衛機制 自我の力動 etc.	絶対判断 性格表現用語 評定誤差 潜在人格論	性格構造の仮説 的認定 (等価の行動 に基づく)
相談を受けたこの人		問題の内容 自己意識混乱 情報不足	問題再見直し Complex 整理	自己再構造化 情報提供	自己実現